

EP-4
Found Tapes



発掘されたテープに刻まれた、EP-4の記憶。EP-4を巡る私的風景史。

Introduction

10代の頃、人は誰しもその後の人生に多大な影響を与えるアーティストとの出会いを果たす。団塊の世代ならそれはビートルズだろうし、筆者のように現在40代前半の人間なら、その代表格はYMOということになる。

そのような、いわゆる“テクノポップ/ニューウェイヴ世代”の人間にとって、EP-4は80年代ニューウェイヴ期に出現した他のどのアーティストとも違うオーラを放っていた。違う言い方をすれば、“やばい空気”が漂っていたのだ。うかつに触れたら、とりかえしのつかない方向(世間的には、反社会的と言われる方向)に足を踏み入れてしまうかのような、危険な空気が。本稿は、そんな“EP-4世代”の一人である筆者個人にとって、彼らがどのような存在であったかを綴っていくというものだ。個人的な思い出話を中心となってしまうが、そこはご容赦いただきたい。

EP-4との出会い。そして5・21シールが届いた

今のようにネットで簡単に音に触れることなど夢のまた夢だった80年代、筆者は『宝島』などのサブカル誌や、日本のインディーズを紹介している一部の音楽誌などに掲載された文字情報や写真で、EP-4の存在を知った。YMOに影響されてテクノカットにし、YMO周辺の情報を漁っていた筆者にとってEP-4というのは、イベント「アーバン・シンクロニティ」で坂本龍一が共演したバンドとして既にアンテナにひっかかっていたし、リーダーの佐藤薫の名前は、坂本龍一のソロアルバム『左うでの夢』(81年)にヴァイオリンで参加していた人、もしくは坂本龍一も参加したタコのアルバムにも関わっていた人としてインプットされていた。しかしその時点でEP-4の作品は発表されておらず、しかも埼玉県(利根川を越えると群馬県になるような田舎町)に住んでいた筆者には、都内で彼らのライブに触れることも容易ではなかった。にもかかわらず、EP-4が妙に気になったのは、雑誌に掲載されている佐藤薫の写真からカリスマとしてのオーラがピンピンと伝わってきたからであり、そのオーラがYMO周辺のどのアーティストとも違っていただけに他ならない。

83年、いつものように目を皿のようにして『宝島』を熟読していた時のこと、興味深い記事が目飛び込んできた。EP-4が「5・21プロジェクト」なるものを企画し、さらには「EP-4 5・21」と書かれただけの謎のステッカーが京都や大阪や東京など大都市にゲリラ的に貼りまくられている、というのだ。

これは単なる宣伝活動ではない。背後に何かやばいものがあるのではないか。そう直感した筆者は、彼らのコンタクト先として記事の終わりに明記されていたスタック・オリエンテーション(これが彼らの単なる事務所ではなく企画団体であることを知るのは、もうちょっと先のことだ)に、勇気を出してある日手紙を送った。「EP-4に興味があるので、シールを送ってください」という文面と返信用切手を同封して。

数日後、学校から帰宅した筆者はポストを見て驚きの声をあげた。なんと、スタック・オリエンテーションから封筒が届いていたのだ。封筒の中に入っていたのは、「5・21ステッカー」の銀版と透明版がそれぞれシートで数十枚。「まだステッカーは大量にありますので、足りなければ、また切手をお送りください」という文面も添えられていた。

さっそく学校や図書館、普段の通学路などにステッカーを貼ったが、今にして思えば、自己満足以外のなにものでもない。社会問題化したレベルの宣伝活動に参加していたとは到底言えないお粗末なものだ。しかし彼らは田舎に住む一高校生のためにわざわざステッカーを送ってくれた。たとえいくらアーティストを好きになろうとも、自分はアーティスト・サイドから見たらしよせん“星の数ほどいるファンという砂の一粒”に過ぎない。しかしそんな砂粒の存在が初めて認められ、活動の末端に関わることが許された。「5・21ステッカー」は、音楽シーンのにも社会的にも一大事件だったが、そういう意味で個人レベルにおいても大事件だったのだ。街中にステッカーを貼っている時、筆者は右翼団体やカルト宗教団体に入信した若者が布教活動している時の“何かに憑かれたようなキラキラした目”をしていたはずだ。純粹であるということはかくも脆く、簡単に洗脳されやすい。でもそれが特定の政治団体やカルト宗教組織でなく、EP-4で本当に良かったと思う。

筆者がEP-4の音に実際に触れたのは、「5・21」騒動から数ヶ月後の9月のこと。日本コロムビアから発売された『Lingua Franca-1』を、地元のレコード店で普通に買ったのだ。演歌やアイドル歌手のポスターが壁を占拠した小さなレコード屋の棚に、差し替えられた昭和大概ジャケットが普通に置かれているという光景。それは、ジャケットに使用された藤原新也の写真が一見すると普通の家に見えて、実は浪人生・一柳展也が金属バットで両親を殺害した家を撮影したものであるという背景を知った途端に不気味に見えるのと同じように(それは、鬱屈した学生生活を送っていた筆者の心象風景でもあった!)、平和な日常生活に異化効果を生じさせる過激なテロ行為として映ったものだ。

スタック・オリエンテーションからはその後もEP-4に関する情報が手紙で届き、同封されたフライヤーをもとに、修学旅行で京都に行った際に新京極のユリナレコードで『Lingua Franca-X』を買ったのは良き思い出(店頭で、スタック・オリエンテーションが発行していた「3-B通信」というフリーペーパーも一緒に入手した!)。また、ニューヨークからエアメールでEP-4のポストカード(家紋からインスパイアされたEP-4の新ロゴがプリントされたもの)が突然届いて驚かされる、なんてこともあった。

EP-4のこうした活動は、今やアカデミックにいくらでも分析することが可能だ。いわゆるバンドとしての形態をとってはいるが、EP-4は単なる音楽家集団ではない。むしろ、政治結社/秘密結社的な危険な匂いを放つ“ストリートの革命家集団”である。しかも彼らの活動には、誰もが望めば参加する(=運動体の一構成員となる)ことが可能であった、等々……。

しかし、かつてEP-4という記号で覆い尽くされていた街も今や無意識な集団的自主規制のもとに無菌化され、すっかり無味乾燥なものとしてしまった。だからこそ筆者は、今再びEP-4を求める。あの危険な毒を、暗闇がなくなって均一化した精密な管理機構に撒きちらすこと。それこそが、かつて「5・21ステッカー」を貼っていた“EP-4に選ばれし少年(あなたのことだ)”が今しなければならぬことではないだろうか。

EP-4の軌跡

申し訳ない。個人的な思い出話が長くなりすぎた。ここからは、EP-4に関する客観的データを書いていきたいと思う。

EP-4が結成されたのは、80年3月。京都の伝説のニューウェイヴ系ディスコ、クラブ・モダーンのプロデューサーであった佐藤薫がDJ、スタッフらと一緒に4人編成(ヴォイス、ギター、ベース、ドラム)の「お遊びバンド」をとあるイベントでやったのが、すべての始まりとされている。それを観に来ていたのが、現在はフランス文学者/翻訳家/作家として活躍する鈴木総(現・創士)。彼がキーボード担当として加入したことで、EP-4は産声をあげる。

その後、メンバーの脱退や加入を経て、82年5月にEP-4は鉄壁の6人編成となる。メンバーは以下の通り。

佐藤薫：ヴォイス
好機タツオ：ギター
佐久間コウ：ベース
三条通：ドラム
ユン・ツボタジ：パーカッション
川島バナナ：キーボード

ちなみに、鈴木総が脱退して川島バナナが加入するまでの空白期間に行なった伝説のイベント、アーバン・シンクロニティ(81年11月9日@京都会館別館ホール)において、キーボードでゲスト参加したのは、前述したように坂本龍一であった。このようにメジャー/マイナーといった対立構造を越えたポスト・モダンな角度から、EP-4は日本のストリート・ロック・シーン(=ストリート・カルチャーという現場)を独自に開拓していったのである。

83年3月には、ペトヨル工房からカセットブックの『制服・肉体・複製』をオフィシャル・ブートレグという形で発表。「5・21プロジェクト」決行日には、80～83年のライブ音源を佐藤薫が大胆かつ過激に編集した『Multilevel Holarchy』がテレグラフから発売されたものの、日本コロムビアより予定されていたスタジオ録音盤『Lingua Franca-1』は、ジャケットに使用した“昭和崩御”という文字が問題となって発売延期になってしまう。

『Lingua Franca-1』の発売延期に関し、当時は「昭和崩御」というサブタイトルがレコ倫に触れた」と報じられた。だが実際は、佐藤薫がレコード会社の担当A&Rに内密のままジャケットを制作し、発売間際になって見せたところ“昭和崩御”という文字にビビってしまい(レコード会社の中でもコロムビアは老舗に属する会社だったのでそれも当然なのだが…)、自主規制されてしまったというのが真相だ。結果的に『Lingua Franca-1』は“昭和大概”ジャケットに差し替えて9月1日にリリース。闇に葬られたかと思われたオリジナル・ジャケットも、『Lingua Franca-X』というジャケット・ブック(付録として12インチ・シングルがつけられた)の形態でペトヨル工房より9月25日にリリースされ、レコード会社が自主規制したもので書籍流通であれば発売できてしまう構造矛盾を暴くこととなったのである。

その後EP-4はヨーロッパ・ツアーを敢行したり、ベルギーやオーストラリアのインディーズ・レーベルより12インチをリリースするなど、海外とコネクした活動が目立つようになっていく。84年12月にはテレグラフより2曲入り12インチ・シングル『Found Tapes』を突如発売してファンを驚かせたのに続いて、翌85年5月21日にはWAVEレーベルより12インチ・シングルの『The Crystal Monster』をリリース。WAVEレーベルは、国内外のインディーズ・レーベルの作品や情報がWAVEを介して往来するようなシステムを作るべく、佐藤薫が企画案を出して設立されたという背景を持っている。そして国内外のツアーや『Lingua Franca-2』のロンドン・レコーディングが予告されたにもかかわらず、87年発売のコンピレーション・アルバム『KYOTO NIGHT』への参加を最後に、EP-4はシーンから忽然と姿を消してしまうのである(メンバーは個々に音楽活動を展開してはいたが)。あたかも、政治犯が姿を隠すかのように。

発見されたテープ

EP-4の活動の背景には、文化政治運動家としての戦略が一貫してあった(この側面に関しては『Multilevel Holarchy』のCDのライナーで毛利嘉孝氏が考察されている。ぜひ一読を)。しかしその中において、85年12月にテレグラフからリリースされた2曲入り12インチ・シングル『Found Tapes』だけは、性質を異にしている。シチュアシオニスト的手法から解放された唯一の作品と言ってよい。

発表を前提とせずに録りためていたテープが発掘されたので、オーバーダビングとリミックスを施してリリースしてしまおう。本作は、そんな軽い動機から生まれた。

しかし、多くのEP-4ファンはそんな単純にはとらえなかった。

「この12インチ・シングルをお前の手でダンスフロアで回せ」

ここには佐藤薫のそんなメッセージが隠されている、と解釈したのだ。事実、青春期にEP-4ファンであったことを公言するクラブDJやアーティストは多い(竹村延和やFPMの田中知之はその代表格)。また90年代に一世を風靡したトリップホップ(アブストラクト・ヒップホップ)のルーツとして、和物エレクトロ/クラブ・ジャズのコンピレーションに音源が収録されるなど、音の先鋭性の再評価作業もクラブ・カルチャー文脈の中では積極的に行われてきている。

今回はCD化に際し、新たに発掘された未発表テープからの音源を2曲、そして「5・21」のソノシート・ヴァージョンがボーナス・トラックとして加えられることになった。佐藤薫の意向のもとに決定した内容は、以下の通り。

1: Elementary Poem

EP-4の妹分的存在だった女性ニューウェイヴ・グループ、グリム・スキップのライブ用カラオケとして制作された曲を発展させたもの。メンバーは通常の担当パートとは違う楽器を演奏し、最終的にバナナのメロトロンを被せて完成させたという。ダビーンな音響空間の中で躍動するアブストラクト無国籍ファンク・ビートは、とてつもなく神秘的かつドラッギー!

2: Five to One

「5・21プロジェクト」のテーマともいべき曲。バナナが買ったメロトロンで遊んでいるうちに何か重ねてみようということになり、できあがった曲のうちの一つとのこと。サイコ・ニュー・ウェイヴ・ファンク・ビートが炸裂した、まさしくEP-4の代表曲である。

3: Song of Shame! 4: Green Eyed Maureen

今回の目玉となる、完全未発表曲。新たに発掘されたカセット・テープの中から佐藤薫自らがセレクトした“ボーナス・ファウンド・トラック”である。ちなみに『Multilevel Holarchy』のCDは、メンバー所有のレコードの中から最も素敵なノイズを発する盤を選んでマスタリングされたという。

「Song Of Shame!」の歌詞は、佐藤薫とチョコヒゲのコラボレーション・シングルに収録された「le chant de la honte!」と同じもの。詩人・富永太郎が書いた「恥の歌」にインスパイアされた詩が歌われている(ただし、曲自体はまったく異なっている)。

5: 5・21

音楽誌「フルズメイト」の83年6月号に付録ソノシートとしてつけられた、5・21プロジェクトの予告編ヴァージョン。「Five to One」をソノシート用にエディット&リミックスし、グリム・スキップのコーラス(というか、叫び声と「エ〜」「ウ〜」といったつぶやき)が大胆にフィーチャーされている。84年7月、オーストラリアのホット・レコードからリリースされた12インチ「Five to One」(収録曲は「5・21」「dead Body(dB)」「Strangeness」「Appuk!(Zoy)」)には、こちらのヴァージョンが収録されていた。

ジャケットに使用されているのは、石の断面写真。フランスの社会学者/哲学者、ロジェ・カイヨワの著作『石が書く』(宇宙や地球の自然風景が石の断面に描かれている、という説が展開された美術書)に思惟を得て、このようなジャケットにしたのだという。確かに、音の記憶(歴史)が刻まれているという点で、レコードの盤面は石の断面に似ている。それらはまた、人によって発見されなければ存在し得ないという点においても。

Five to One

最後にEP-4の現在について触れておきたい。

残念なことに、メンバーの好機タツオさんと三条通さんは既に鬼籍に入った。合掌……。となると、EP-4が再び我々の前に姿を現すことはもう望めないのだろうか。今回、佐藤薫は未だEP-4の呪縛が解けずにいる人たちのために、このようなメッセージを寄せてくれた。

「EP-4はそれぞれ都市伝説のように色々語られているけれど、実際には何かやろうと思えば誰かが見あたらぬ。しかも今度は本当の喪失がやってきた。それが続いているってことだよ。だからEP-4は解散もしてないし、活動も停止していない」

今回、音楽地層の中から発掘されたEP-4の音は、化石でも遺物でもなかった。

これは“新たな5・21”に向けての布石なのだ。

リマスタリングされた音源を聴きながら、筆者は実家のポストに「5・21ステッカー」が大量に届いた日と同じ興奮を再び味わっているところだ。

2010年8月15日 小暮秀夫

[パッケージ・スタフ] 監修:佐藤薫、地引雄一 リマスタリング:中村宗一郎(ピースミュージック)

制作: SUPER FUJI DISCS/DIW/diskunion 03-3511-9920

●ディスクの汚れは番号の読み取りを妨げますので、汚したり傷つけたりしないようご注意ください。●汚れがいたときは、柔らかい布で内側から外側に向かって軽くふきとってください。●レーベル印刷面は保護膜が太厚いので、傷つけたらボールペンや鉛筆で書き込まないでください。●直射日光の当たる所、暖房器具の近くなど、高温の所には保管しないでください。●とくに車のリアトレイなどへの放置はご注意ください。また湿気の多い所も避けてください。

Memories of EP-4 etched into the unearthed tapes-a personal take on the landscape surrounding EP-4

Introduction

Most people in their teens discover an artist or artists who greatly influences their later lives. For baby boomers this would be the Beatles, and for many of those in their early 40s (like this writer), this would be YMO (Yellow Magic Orchestra).

For the latter, who belonged to the techno pop/new wave generation, EP-4 exuded an aura that was quite distinct from other artists that emerged during the new wave movement of the 80s. Specifically, the band exuded the sort of danger that implied that, unless careful, the listener could find oneself on the path of no return (the “anti-social” path). This essay is an attempt to describe what EP-4 meant to me, a member of this EP-4 generation. I ask readers for their understanding, as much of the essay will include my personal memories of those days.

My encounter with EP-4, and the arrival of the 5-21 stickers

During the 1980s, when no one even dreamt of music being easily accessed over the Internet, I discovered EP-4 through articles and photos in subculture magazines such as Takarajima and music magazines that featured Japanese independent bands. At the time I was a fan of YMO, and wore a “techno-cut” hairstyle. I was madly searching for any information related to YMO and the music scene at the time. I had already become aware of EP-4 as the band that Ryuichi Sakamoto performed with at an event titled “Urban Synchrony”. I was also aware of the fact that EP-4’s leader Kaoru Sato had participated in Sakamoto’s solo album *Left-Handed Dream* (1981) playing violin, and of his involvement in Tako’s album, on which Sakamoto also performed. At that stage, however, EP-4 hadn’t released any albums, while it wasn’t easy for me, who lived on the outskirts of Saitama Prefecture (a town so remote that Gunma Prefecture lay on the other side of the Tone River), to see them perform in the city. Despite this, EP-4 got under my skin after seeing photos of Kaoru Sato in magazines and sensing his charismatic aura which was distinct from the aura exuded by any of the other artists associated with YMO.

One day, in 1983, I was, as usual, avidly reading the newest issue of Takarajima when I came across an article that piqued my interest. EP-4 had apparently launched something titled the “5-21 Project”, and mysterious stickers featuring the text “EP-4 5-21” were appearing, guerrilla style, in major Japanese cities including Kyoto, Osaka and Tokyo.

I sensed that this initiative represented something much more significant than a promotional campaign, and so I summoned the courage to write to the band, sending my letter to Stack Orientation, which was the contact for EP-4 provided at the end of the article. (I later found out that this was not just an office but a planning and production company). I asked them to send me some stickers as I was interested in EP-4, and included some stamps with the letter.

Several days later, I arrived home from school, looked inside the letterbox. Much to my surprise, there was an envelope from Stack Orientation. The envelope contained several dozen sheets of the 5-21 stickers, both the silver and the transparent versions. Stack Orientation had also replied to my letter, informing me that they had a lot more stickers and to send some more stamps if I wanted more.

I immediately began putting the stickers up on the way to school, at school, and at the library. In retrospect, however, this was a purely indulgent exercise on my part. In no way was I participating in this project that reflected Stack Orientation’s level of social awareness. Despite this, they had bothered to send these stickers to a mere high school student living in a remote regional area. No matter how much of a fan I was, from the perspective of the band, I was just another fan amongst thousands – a single grain of sand on the beach, a single star in the sky, and yet EP-4 had recognize this grain of sand and enabled me to become involved at the fringes of their campaign. Although the 5-21 stickers represented a musically and socially significant event, it also represented a personal milestone for me. As these stickers were being put up throughout the streets of Japan, I’m sure that my eyes were glittering in exactly the same way as the eyes of proselytizing young members of a right-wing organization or religious cult. Being innocent also means being vulnerable and easily brainwashed. I’m just relieved that I was a follower of EP-4 rather than a member of a specific political organization or religious cult.

The first time that I actually heard EP-4’s music was in September 1983, several months after the turmoil surrounding 5-21. I’d bought, at a local record store, a copy of the album *Linga Franca-1* released on the Nippon Columbia label. I found the album, with the replacement *Showa Taisha (Showa Emperor’s Amnesty)* cover, on the shelf of the small record store, the walls of which were covered with enka (Japanese popular music) and pop idol posters. The album cover featured a photograph by Shinya Fujiwara which at first glance appeared to be of an ordinary house. I later discovered that in fact it was the house where Nobuya Ichiryu, a student making his second attempt at entering university, had murdered both his parents with a metal baseball bat. The album cover suddenly took on an ominous tone (also because it reflected the state of my mind at the time as I led a fairly depressing student life) and represented an extreme act of terrorism that seemed to threaten my normally peaceful everyday life.

Later another envelope arrived from Stack Orientation containing more information about EP-4. I have happy memories of buying *Linga Franca-X* at Yurina Records in Shin-Kyogoku in Kyoto on a school excursion after seeing the album advertised on the enclosed flyer. I also picked up a free newsletter at the record store, titled *3-B Tushin*, issued by Stack Orientation! Another time I was surprised by the sudden arrival, from New York, of an EP-4 postcard (featuring the band’s new logo inspired by the traditional Japanese family emblem).

Various academic analyses of EP-4’s activities are possible today. EP-4 may have adopted the format of a band, but it is much more than just a group of musicians. If anything, it is an organization of street revolutionaries exuding a dangerous aura more typical of a political organization or secret society. Indeed, anyone could participate in their activities (that is, join the movement).

The streets that had once been covered with the EP-4 symbol have become sanitized by an unaware and collective restraint, transforming the streets into uniformity and monotony. That’s why this writer wants EP-4 to come back. I want that dangerous poison to be scattered throughout the homogenous and precise control mechanism in which everything has been revealed, and nothing lies hidden anymore. This is what EP-4’s chosen youths (that is, you), who had once gone around putting up the 5-21 stickers, must do today.

The EP-4 trajectory

I must apologize. I’ve written far too much about my personal memories. I shall now focus on providing more objective information about EP-4.

EP-4 was formed in March 1980. It all began when Kaoru Sato, founder of new wave disco Club Modern, formed a four piece (voice, guitar, bass and drums) “play band” of club DJs and employees to perform at an event. In the audience was Soh Suzuki (now Soshi Suzuki) who is now a writer, French literature specialist and translator. EP-4 was formally launched when Suzuki joined the band as the keyboard player. The band then underwent subsequent member changes and by May 1982 EP-4 had become a tight band comprised of the following six members.

Kaoru Sato: Voice
Tatsuo Kohki: Guitar
Koh Sakuma: Bass
Tohru Sanjo: Drums
Yung Tsubotaj: Percussion
Kawashima Banana: Keyboard

As previously mentioned, Ryuichi Sakamoto joined EP-4 on keyboards at the legendary event “Urban Synchrony” (held on 9 November 1981 at the Kyoto Kaikan Concert Hall’s annex), held during a period of inactivity that followed Soh Suzuki leaving, and Kawashima Banana joining, the band. It is an example of EP-4’s unique and groundbreaking initiatives in Japan’s street rock scene (the setting for Japanese street culture), underpinned by a postmodern perspective that transcended the conventional conflict between the concepts of “major” and “minor”.

In March 1983, EP-4 released, through Peyotl Koubou, the “official bootleg” cassette book *Seifuku, Nikutai, Fukusei (Costume, Corps, Copy)*. On D-Day of the 5-21 Project, *Multilevel Hierarchy* - a compilation of EP-4’s live recordings from 1980 and 1983 featuring Kaoru Sato’s extreme editing - was released from Telegraph Records. The studio album *Linga Franca-1*, scheduled for release by Nippon Columbia, was postponed because of issues surrounding the words *Showa Hogyo (Demise of the Showa Emperor)* on the album cover.

As far as the postponement of *Linga Franca-1* is concerned, according to reports at the time, the subtitle *Showa Hogyo* contravened the guidelines of the Japan’s record censorship board. In actual fact, Sato had designed the album cover without informing the record label’s A&R department of its content. Columbia essentially freaked when they saw the subtitle *Showa Hogyo* gracing the cover which Sato showed them just before the scheduled date of release. (This reaction, however, is quite understandable when one considers that Columbia was the first record label established in Japan). As a result, Columbia decided to stop the release. *Linga Franca-1* was later released on 1 September with the new *Showa Taisha* cover. The original cover, which everyone thought would end up being swept under the carpet, was eventually released by Peyotl Koubou on 25 September 1983 as an “album book” titled *Linga Franca-X* (accompanied by a 12 inch EP). This move revealed the contradiction of a product that was voluntarily removed from the market by a record label because of potential censorship issues then being able to be distributed through Japan’s book distribution network.

After this, EP-4’s activities took on an increasingly international tone. The band toured Europe and released 12 inch records from Belgian and Australian independent labels. Fans were surprised by the sudden release – from Telegraph Records in December 1984 - of a 12 inch EP *Found Tapes* containing two tracks. This was followed by the release of a 12 inch EP *The Crystal Monster* from the Wave label on 21 May 1985. The Wave label was formed after a proposal by Kaoru Sato for a system that enabled records and information to be exchanged between Japanese and overseas independent labels using Wave as the medium of exchange. Despite plans for a national and international tour and for the recording of *Linga Franca-2* in London, the band’s inclusion in the compilation album *Kyoto Nights*, released in 1987, marked the end of the band’s activities, and EP-4 suddenly disappeared from the scene (although its members continued to pursue their individual careers), like a political offender who suddenly vanishes.

The rediscovered tapes

Behind EP-4’s activities lay a consistent strategy of cultural and political activism. (Yoshitaka Mouri has written about this in the liner notes for the *Multilevel Hierarchy* CD, which listeners are urged to read). Out of all of EP-4’s releases, however, the 12 inch EP *Found Tapes*, released by Telegraph Records in December 1985, is most atypical of the band’s sound. It is arguably the only work to which EP-4’s situationist approach doesn’t apply.

The band happened to rediscover some tapes which had been recorded without any real plans for release. It was decided to overdub and remix the tracks and release them as a single. This is the simple motive behind the release of this record.

Most EP-4 fans, however, didn’t interpret this so simply.

“Play this 12 inch vinyl and hit the dance floor”

Fans thought that this was the message from Kaoru Sato. Indeed, many current club DJs and artists (such as Nobukazu Takemura and Tomoyuki Tanaka of FPM) proclaim that they were fans of EP-4 during their youth. EP-4’s music has been included in Japanese electronic and club jazz compilation CDs, and is seen as representing the roots of trip hop (abstract hip hop) that took the world by storm during the 90s. In this way, EP-4’s ground breaking sound is being reassessed in today’s club culture.

To mark the CD release of this record, two tracks from the rediscovered and unreleased tapes and a track from the sonosheet version of *5-21* have been added as bonus tracks. The following are the tracks personally chosen by Sato.

1: Elementary Poem

An updated version of a song by female new wave group Grim Skip - EP-4’s “sister group” - produced as a karaoke track for live performance. The members perform on instruments other than what they normally play, with the addition of mellotron, paid by Banana. The abstract, borderless funk beat leaping through the dub-filled sound space is infinitely mystical and totally druggy!

2: Five to One

What could be described as the theme song of the 5-21 Project. This track was born when Banana was playing with the mellotron that he’d recently purchased, after which the band decided to add some other sounds. Featuring an explosion of psycho new wave funk beats, this track most typifies EP-4’s sound.

3: Song of Shame!

4: Green Eyed Maureen

Two unearthed tracks and the showpiece of the CD, these are bonus rediscovered tracks which Sato selected from the unreleased cassette tapes. Incidentally, the *Multilevel Hierarchy* CD is a remastering of the most exquisite scratches and grooves from the band members’ vinyl records.

The lyrics of *Song Of Shame!* are the same as those in *le chant de la honte!*, the collaboration single between Kaoru Sato and Chiko Hige. The lyrics were inspired by the poem *Haji no uta (song of shame)* by poet Taro Tominaga (although the song is different from the original version).

5: 5-21

A ‘preview’ of the 5-21 Project, released as a sonosheet that came with the music magazine *Fools Mate* in June 1983. *Five to One* boldly features a chorus (more specifically, screaming and whispering) by members of Grim Skip. This version was included in the 12 inch EP *Five to One* released by Australian label Hot Records in July 1984 (also featuring *dead Body (dB)*, *Strangeness*, and *Appuk! (Zoy)*).

The album cover features a photograph of a cross section of a rock. Sato was inspired by French sociologist and philosopher Roger Caillois’ work *The Writing of Stones* (a book on art in which Caillois theorizes that the cross sections of stones represent the natural landscape of Earth and the cosmos) and wanted to feature this on the cover. Certainly, the surface of a record is similar to the cross section of a stone in the sense that memories (the history) of sound are etched into a record, and that these can only come into being when discovered by humans.

Five to One

In conclusion, I’d like to touch on EP-4’s current status.

Sadly, Tatsuo Kohki and Tohru Sanjo have passed away, and I pray for their souls. Does this mean that we will never have the opportunity to see EP-4 again? The following is a message from Kaoru Sato for those of us who remain under EP-4’s spell.

“Like urban myths, many things are said about EP-4, but in actual fact, whenever I thought of doing something involving EP-4, someone was always missing. We’ve now literally lost two members. But nothing’s really changed. EP-4 never disbanded, nor did it ever stop operating.”

EP-4’s sounds, unearthed from the musical strata, are neither fossils nor artifacts.

It represents a strategic move towards a “new 5-21”.

As I listen to the remastered sounds, I find myself experiencing the same sense of excitement that I felt when dozens of 5-21 stickers arrived in the mail all those years ago.

Hideo Kogure, Music Critic

15 August 2010

Translated by Lotte Lawrence